

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	新井 正人
主 論 文 題 名： 鷗外文学の学的背景—心理学・隣接諸学受容の射程—				
(内容の要旨) 本論は、鷗外文学が近代心理学やその隣接諸学の影響下に生成する様相について、包括的に明らかにしようとするものである。坪内逍遙や二葉亭四迷など、近代日本文学には、心理学やその隣接諸学の知見を背景とした「心理的観察」を主眼とする文学の系譜が存在する。鷗外文学もその系譜に連なり、その実践は大正期以後の文学表現にも影響を与えた。しかしながら、鷗外における心理学・隣接諸学の受容と文学表現生成との関係性は必ずしも詳らかでない。本論は、そうした点について、手沢本の調査・分析、及び評論や文学作品の読解を通じて作家論的に解明することを企図し、鷗外という視座によって、近代日本文学にける「心理的観察」の表現史を照射する試みである。 以下、各章の概要を記す。 序章「「心理的観察」の学的背景」では、如上の点に言及し本論における論述の枠組みを概観した。本論は3部8章よりなる。 第1部「主体の言説的構築」では、鷗外が種々の学術的言説に基づき内面心理に中心化された主体を如何に文学の中で立ち上げていったのか、その様相を追った。 第1章「「言葉」としての心理」では、鷗外文学の生成に際し、ドイツ語圏の近代心理学や心理主義的諸学の受容が不可欠の契機であったことを示した。留学中の鷗外は当時のドイツ思想界の心理主義的風潮の下、自然科学と哲学の協同と総合を志向する19世紀後半の哲学的・心理学的認識論を概観し心的領域への強い関心を涵養した。帰国後、鷗外はハルトマンの自然科学的観念論を支柱に評論活動を展開し、同時にショーペンハウアーの主意主義的哲学にも影響を受けたが、徐々に関心は心理学的主意主義の立場を取るヴントの帰納的形而上学構築の試みへと移行した。フェヒナーの実験美学やパウルゼンの倫理学など当時の心理主義的諸学を受容する中で、鷗外は今後の「新しい哲学」の具現化をヴント的な帰納的形而上学のさらに先に見通した。こうした思索を経て、その後鷗外は小倉在任中に当時の心理主義的諸学の基礎学たる経験的心理学を学んだ。そこで鷗外は、魂に関する形而上学的難問を回避し、心的現象に関する説得的記述体系の構築を目論む学知として経験的心理学を捉えたが、その知見のみならずそれを踏まえた				

新たな哲学的心理学との協同によってこそ心的領域をめぐる諸問題のより十全な解明が可能となると想定した。鷗外は自然科学と哲学の協同と両者の総合の可能性を心理学に見ていたと言える。加えて、経験的心理学の受容は、言語的構築物として人間心理を把握すること、心的過程は言語的に表象されることで行為遂行的に現出するものに他ならないという認識を鷗外に齎した。そして、こうした心理学受容は鷗外の文芸観を規定し文壇復帰後の表現実践のあり方を方向付けた。自らの表現実践に心理学を援用した鷗外の企図は、単に細密に人間心理を描き出すための技術的側面のみにあった訳ではなく、そこには、哲学と自然科学の相互交渉のもとに生れ、人間心理の在り方を記述的に構築していく近代心理学の思想的・方法論的特性を引き受け、因襲に縛られない新たな人間観や世界観を提示しようとする積極的戦略があった。明治 40 年代には心理学の知見に影響された文学創作が多く行われるようになっており、その意味では鷗外の営為もそうした同時代的趨勢の圏内に位置付けられる。だがその中であって、心理学の思想的背景をも認識し、自然科学と哲学との総合への志向を文学において「書く」ことを通じ行為遂行的に具象化しようとした鷗外の営為はやはり特異であったと言える。

第 2 章「Seele をめぐる論理」では、鷗外の心身観とその文学への展開の様相を、特に心身問題をめぐる様々な学術的言説の受容という側面から明らかにしようと試みた。鷗外は心身問題に一貫して関心を有しており、形而上学と経験科学の両側面から思索を重ね、それは文壇復帰後の表現実践の在り方にも影響を与えた。留学中より、鷗外はフェヒナーやロッツェによる性質二元論（中立一元論）や、自然科学者の側からも提唱されていた同様の学説を受容することで心身観の骨格を形成した。のち小倉在任中には、近代心理学の知見により性質二元論を経験主義化した心身並行説にも強い関心を寄せている。また、鷗外の心身観には、生命原理を統括するものとしての生氣論的靈魂観の影響もみられる。こうした学的背景により、鷗外は「魂と肉体」の有機的統一体として人間存在を捉えた。そして、文壇復帰後においては、自然主義文学の唯物論的人間観に対抗しつつ、新ロマン主義の方法を参照して如上の心身観に基づく文学表現を構想した。その理路は「青年」にもっとも端的に見出される。鷗外にとって文学とは、「魂と肉体」としての主体が抱える存在論的揺らぎを行為遂行的に表象する可能性を有する言語的営為だった。「魂と肉体」の表象可能性を追い求めた鷗外の表現実践は、主体のそうした二面性を整合的に理解するために苦闘した 19 世紀末学知の課題を引き受け、それを表象しようとする試みだったと言える。

第 3 章「構成的外部への理路」では、世紀転換期西欧の識閥下をめぐる種々の言説を受容しつつ成型された鷗外の思索の跡を辿り、そうした思索の展開として鷗外の文学

的営為を捉え直すことを企図した。鷗外はドイツ留学中より、当時の心理学において重要であった「識閥」概念に興味を示しており、それは後の鷗外の心理認識を規定した。帰国後、鷗外は創作主体の創造力に着目するゴットシャルの理論を経由した後、ハルトマンの芸術創作理論に強い関心を寄せた。それは、芸術創作の機構を心理学的に解析し、意識的自己の背後に識閥下の力動を抱え込んだ存在として主体を捉えつつ、創造力の源泉として創作主体の識閥下に着目する理論であった。鷗外はこの理論の受容を通じ、主体の識閥下を重視する認識を強くしたものと思われる。鷗外はその後、夢や催眠術をめぐる精神医学・心理学・神経生理学等の医科学的知見を継続的に摂取し識閥下への理解を深めた。そして、こうした知的背景を反映する作品として「魔睡」が執筆された。本作では、意識的・理性的自己と識閥下の力動との相互的な力関係の裡に揺らぐ主体の様相が描き出される。鷗外は文壇復帰後の小説において、「魔睡」のそれのように識閥下を言語化する語り手を頻用した。それは、同時代の文学場を意識した鷗外の戦略的な表現実践であった。鷗外は、写実主義を基盤としつつも神秘主義的文脈を作中に併存させる新ロマン主義の手法に影響されつつ、自然主義リアリズムとは異なる文学表現の可能性として識閥下の力動を表象することを志向した。さらに、如上の表現実践は、意識的自己のみを特権化する硬結した主体ではなく、自らの構成的外部との関係において生起する流動的な主体を表象するための試行として位置づけ得る。同時代西欧の学的コンテクストを引き受けつつ主体の識閥下を表象することを企図した鷗外の表現実践は、フロイトの影響下に成った芥川龍之介や新心理主義の表現実践に先立つものであり、それは主体の構成的外部への着目を通じ主体存立の力学を問い返すものであったと言える。

以上第1部の論述を踏まえつつ、以下第2部「主体の言説的脱構築」では、自らの構築した内面心理に中心化された主体をさらに脱構築していこうとする志向が鷗外文学には内在している点について明らかにした。

第4章「倫理的主体の形成と変容」では、種々の契機によって形成された鷗外の教育観を検証し、そうした視座から鷗外言論の特質を把握することを企図した。鷗外は帰国直後から「一個人の材能」の「不偏発達」を志向し教育政策への関心を示していたが、それは、小倉在任中を中心とする倫理をめぐる思索を経て「徳育」の問題へと焦点化されることとなる。鷗外はパウルゼンやキュルペの倫理的枠組みを参照しつつ、倫理的行為は、その行為の主体に内在的な心理的要因と、外在的な倫理的標準・規範の二方面の力関係の上に成立すると捉えた。そこでは、理性による判断、或いは良心が、個人と社会との関係における利己と利他の均衡点としての倫理的規範を意識化することで倫理的行為が実践されると見做される。理性の判断とは、主体的な「選択の自由」としての

意志の自由の行使に他ならないが、鷗外は決定論的な人間観に与することなくあくまでも意志の自由の存在を前提とした。そして鷗外は、方法を心理学に目的を倫理学に置くヘルバルト教育学を受容した。ヘルバルト教育学は、「選択の自由」としての意志の自由を想定する人間観に基づきながら、思想圏の陶冶による道徳的品性の完成を目的とする体系であるが、その枠組みは文壇復帰後の表現実践に批判的に活かされた。鷗外は、文壇復帰後から晩年に至るまで教科書用図書調査委員として修身教科書の策定に関与した。だが、鷗外は単に既存の規範による個人の主体化＝服従化を企図したわけではない。講演「混沌」に示されるように、鷗外が企図したのは既存の規範の脱構築と再構築を行うような自己創出的主体の形成である。「キタ・セクスアリス」では規範的主体化の不可能性が、「青年」では既存の倫理的規範の超克と再創出の可能性が示されている。「一個人の才能」の「不偏発達」を志向した鷗外の教育観は、倫理性の源泉でありなおかつ規範の再創造への契機を孕む主体的選択としての意志の自由を行使可能な主体、自己創出的な「混沌」としての主体への期待として結実したのである。こうした倫理的主体の形成をめぐる思索、社会政策としての教育の在り方の探求は晩年に至るまで鷗外の関心の対象であった。

第5章「“Vita sexualis”という言説装置」では、クラフト＝エビング『性的精神病質』を参照しつつ、性科学受容の影響という観点から鷗外の性をめぐる言説の位相を明らかにすることを企図した。鷗外が明治20年代から30年代にかけて医学雑誌に発表した性をめぐる論説は、クラフト＝エビングを中心としつつ、性科学という、同時代のドイツ語圏において誕生間もない学的枠組みを日本に移植するにあたり先駆的な役割を果たしていた。鷗外は『性的精神病質』から、「露呈症」、「被打症」、「情錯（反対的性感覚）」などの性倒錯概念を受容し、さらに性欲の量的多寡をめぐる問題系を受容していた。つまり、鷗外は医科学的な知によって性を対象化し、それを質的・量的な正常／異常という区分の下に意味付けをしてゆく認識の枠組みを受容していたと言える。鷗外が医学雑誌に発表した性をめぐる論説は、性を医科学的な知の管理下に組み込んで行こうとする、衛生学者・鷗外の志向を示すものであった。だが、鷗外は性科学受容を反映させつつ執筆された「キタ・セクスアリス」において先述の権力性を批評してみせる。作中手記「VITA SEXUALIS」の執筆・隠蔽行為を主題化した本作は、鷗外が受容した性科学知に依拠しつつも、そうした知の枠組みにより性を言説化することの限界を呈示することで、性科学言説の制度性や、そうした知＝言説によって性を言説化することの権力性を可視化している。そして、こうした批評性は、同時代に流行した自然主義文学に向けられたものであった。自然主義文学の流行によって齎されたのは、性をめぐる告白の主体の真実との契合と、それを引き受け得る文学やその生成主体の特権化という事態である。「キタ・セクスアリス」は枠物語という形式を用いて、或る主体が手記という文学的随筆によって性の告白を為そうとしそれが挫折する様を示したが、それは自然主義文学によって成立した特権的構図への反措定となっている。鷗外は告白の不可能性

に想到し、性科学的な主体、すなわち性的欲望に中心化された主体を脱構築する志向を有していたと言える。

第6章「表象心理学と物語行為」では、表象心理学の受容が鷗外文学の構築方略に与えた影響の射程を明らかにすることを企図した。鷗外は、小倉時代にリントナー『経験的心理学教本』を精読することで、ヘルバルトの表象心理学を受容した。表象心理学は、心内に識閾上／識閾下という階層構造を措定し、識閾を境界に表象が浮沈する力学的流動体としての心的過程を把握する。そのことにより、或る時点において意識化された心的状態について、そうした心的状態が現出するにあたり作用した識閾下の力動を措定することで、当該の心的状態の生成を因果的に記述することが可能となる。鷗外はこうした枠組みを語りに援用し、登場人物の心理状態や行為の要因を精緻に描写することを通じ、心的因果性を主軸とする小説の構築を企図した。「金貨」など明治40年代の小説はその実作としての側面を有し、「雁」はそうした表現実践の結実として位置付けられる。だが「雁」は、同時に、作中作である「雁と云ふ物語」の生成自体を対象化するメタフィクション性によって語り手の作為を読者に露呈させることで、登場人物の心理を因果的変移として構成する語りの装う客観性を相対化し、その恣意性を批評するテキストとして構築されている。そして、こうした批評性は鷗外自身が同時期に想到した倫理的立場の反映と解される。表象心理学は心内に識閾下の力動を措定するが、それは本来不可知の領域であり、結局、動機を確定し記述する心理記述は語り手による恣意を免れることは出来ない。このような認識を得るに至った鷗外は、「サフラン」において対象の他者性を尊重し語り手の恣意を抑制する「物語のモラル」を言明する。こうした倫理的立場は、心的因果性を主軸とする小説の構築から、家系図に依拠した叙述の成形を企図する史伝と鷗外を向かわせる要因の一つであったとも推察される。表象心理学の受容は、心的因果性の記述的構築とその限界をめぐる認識を鷗外に齎し、それは鷗外の表現実践のあり方にも影響を与えていたと結論される。

第3部「学的背景の実相」では、第7章「G.A.リントナー『経験的心理学教本』受容の様相」及び第8章「O.キュルペ『哲学入門』・『心理学概論』受容の様相」を通じて、第1部第2部の論述を補完すべく、鷗外が精読し、その文学の形成にも大きな影響を与えたリントナーとキュルペの著作について、一部本文の翻訳及び書き込みの翻刻・翻訳を行い、さらに解題を付加し書き込みや繙読の様相について考察した。

以上3部8章の叙述を通じ、本論では、鷗外文学における内面心理に中心化された主体の言説的構築と脱構築の様相について、その基盤となる種々の学的背景に着眼しつつ比較文化的・比較思想的視座から明らかにした。

## Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	<input type="checkbox"/> "KOU" <input type="checkbox"/> "OTSU" No. <small>*Office use only</small>	Name:	Masato Arai
Title of Thesis: Disciplinary background of Ogai Mori's writings: Range of acceptance of psychology and a variety of similar disciplines 鷗外文学の学的背景—心理学・隣接諸学受容の射程—			
Summary of Thesis:  <p>This paper discusses the relationship between the disciplinary background and the development of Ogai Mori's literary expression, particularly focusing on his acceptance of modern psychology and a variety of other similar disciplines. Ogai was liberal in entertaining a broad range of knowledge concerning the understanding of the inner state of mind, gained from such fields as psychology, psychopathology, sexology, philosophy, ethics, and pedagogy, in the German-speaking countries. Such acceptance of knowledge defined the essential features of his writing. For example, Ogai welcomed the epistemological implications of the synthesis of metaphysics and natural science, which was a trend in the intellectual world of contemporary Germany. And given this attitude, he took a critical stance toward the materialistic naturalistic literature, and incorporated in his own novels the neoromantic approach in which mystic contexts are made to coexist, albeit based on realism. Ogai tried to represent, in his writing, the fluid subject that undergoes becoming through the dynamic of the confrontation and harmony of opposites, based on a view of the mind and body as a unity of 'soul and body', as well as on the dualistic mental recognition of being over/under the threshold of consciousness (being conscious/unconscious). Furthermore, this understanding of the subject led Ogai, while accepting some findings of sexology, to criticize, in his writing, the condition of the subject as centered on sexual desire, which is the premise of sexology. Moreover, while referring to pedagogy and ethics, Ogai explored the possibility of the norm-disturbing creative subject, going beyond the internalization of existing dominant norms. Thus, Ogai's work consistently emphasized the subject's inner state of mind. In his later years, however, devoted to the writing of historical novels, Ogai revised the technique of the novel itself, which had traditionally emphasized psychological description, based on the subjective focus described above. In conclusion, Ogai's literary activity developed as a sequential process of construction and deconstruction of the subject centered on the inner state of mind, on a conceptual foundation shaped by a variety of disciplines.</p>			